サー・トマス・ブラウンとメランコリー

河　野　　豊

アメリカの作家・批評家であるスーザン・ソンタグ(Susan Sontag, 1933-)の著書に『土星の徴しの下に』という評論がある。[1]　この本は内容もさることながら、その題名が西洋占星術を踏まえたものであることで読者の興味を引く。そもそも占星術は古代メソポタミアに生まれ、アラビア天文学を経て、西欧に伝わったと言われており、近代科学が発達した17世紀以降、その信憑性には疑問があるものの、20世紀の今なお、一般に命脈を保っている。ソンタグが占星術を信じているかどうかはさておき、彼女は自らの著書に「土星」という語を用いることで、「土星」がもつ象徴性を利用していると言えるだろう。その象徴とは、すなわち「メランコリー(melancholy)」である。現代になっても、土星＝メランコリー、という連想は少なくとも英語圏では生きていると考えられる。

小論の目的は、サー・トマス・ブラウン(Sir Thomas Browne, 1605-82)がmelancholyという語をどのように用いているかを検討し、その意義及び時代性を明らかにすることである。イギリス文学史の中で、melancholyという語が作品の中に目立って表われてくるのは、16世紀後半から17世紀前半であるから、ブラウンの生きた時代と重なっている。

では、ブラウンについて述べる前に、melancholyという語がどういう歴史を持っているかを簡単に振り返ってみたい。

1　melancholyの歴史[2]

本来melancholyは医学用語であり、病気の一種を指していた。その語源となった「黒胆汁」は、いわゆる四体液(blood、phlegm、yellow bile(=choler)、black bile(=melancholy)、の一つで、冷たく乾いた性質を持ち、人間の体内で多くなると、気分が滅入ったり、物思いに沈んだり、狂気に陥ったり、果ては自殺を企てたりするとされた。四体液説は、ヒポクラテス(460?-377? B.C.)が唱えたと言われている。「人間の身体の中には血液、粘液、黄胆汁、黒胆汁がある。これらが身体の性質を構成し、これによって人間は痛みを感じたり健康を享受したりする。さて人間が最も完全に健康になるのは、これらの要素が力と量の混合の点で互いに正しく釣り合い、完全に混じり合ったときである。これらの

要素の一つが過少あるいは過多になったときや、身体の中で他の要素と混ざらずに分離したときに苦痛が感じられる。」[3]　四体液の「四」という数は、四大元素（地水火風）の数であり、大宇宙と小宇宙（＝人間）との照応から、人間の場合には四体液説となったと考えられる。熱冷湿乾という四大元素の性質も四体液に受け継がれた。

この四体液説を人間の気質に応用したのがガレノス(A.D.130?-200?)である。メランコリーは病気の一種であるとともに、人間の気質の一タイプと見なされるようになった。ガレノスによれば、四体液のどれかが優勢になることで、例えば陽気になったり、陰気になったり、鋭敏になったり、鈍重になったりする。この考え方が後世にまで大きな影響を及すことになった。つまり文学作品における性格描写や行動パターンの説明に四体液説が用いられることになったのである。(ベン・ジョンソン(1572-1637)の気質喜劇はその典型である。)

また、ギリシャ神話では神の怒りに触れた英雄たちは狂気に至らしめられることから、狂気は「英雄病」と呼ばれたが、それはメランコリーによっても引き起こされるので、メランコリーは英雄的な性質を持つものとされた。プラトンの「狂気」(『パイドロス』244A）はその一例である。さらにアリストテレスの名が冠せられている『問題集』は、メランコリーに卓越性を認めている。「哲学であれ、政治であれ、詩であれ、或いはまた技術であれ、とにかくこれらの領域において並外れたところを示した人間はすべて、明らかに憂鬱症であり、しかもそのうちの或る者に至っては、黒い胆汁が原因の病気にとりつかれるほどのひどさであるが、これは何故であろうか。」[4]　この「並み外れた」という性質が、ルネサンス期イタリアの人文学者マルシリオ・フィチーノ(1433-99)によって強調され、近代的な意味での天才という概念に到達する。つまり、メランコリーは天才にとって無くてはならないものとなったのである。ここに至ってメランコリーは、はっきりと肯定的な価値を持つようになった。

シェイクスピアのハムレットはメランコリーに陥った人間の好例である。その物思いに沈む傾向、優柔不断、自暴自棄などは、メランコリーの特徴をよく表している。ロバート・バートン(Robert Burton, 1577-1640)の『メランコリーの解剖』(*The Anatomy of Melancholy*, 1621)は、病としてのメランコリーを治癒することを本来の目的とした医学論文であるとともに、ルネッサンス的豊穣さを示す百科全書的著作である。しかしメランコリーそのものをはっきり描いた文学作品としては、ジョン・ミルトン(1608-74)の『沈思の人』(“Il

Penseroso”)がある。この詩は『快活な人』(“L’Allegro”)と対をなし、『快活な人』の後に置かれている。その「後に置かれている」ということが、メランコリーの卓越性を表すことになる。

2　ブラウンの著作中における“melancholy”

(1)『医師の信仰』

ブラウンの最初の著作、『医師の信仰』(*Religio Medici*, 1643)において、melancholyは次の6箇所で使われている(下線は引用者)。

1 Part I, sec. 7.

... Which error I fell into upon a serious contemplation of the great attribute of God his mercy, and did a little cherish it in my selfe, because I found therein no malice, and a ready weight to sway me from the other extream of despaire, whereunto <u>melancholy</u> and contemplative natures are too easily disposed.[5]

2 Part I, sec. 24.

'Tis not a <u>melancholy</u> *Utinam* of mine owne, but the desires of better heads, that there were a general Synod; not to unite the incompatible difference of Religion, but for the benefit of learning, to reduce it as it lay at first in a few and solid Authors....[6]

3 Part I, sec. 30.

I hold that the Devill doth really possesse some men, the spirit of <u>melancholy</u> others, the spirit of delusion others; that as the Devill is concealed and denyed by some, so God and good Angels are pretended by others, whereof the late defection of the Maid of Germany hath left a pregnant example.[7]

4 Part I, sec. 46. (2箇所)

... it hath not onely mocked the predictions of sundry Astrologers in ages past, but the prophesies of many melancholy heads in these present, who neither understanding reasonably things past or present, pretend a knowledge of things to come, heads ordained onely to manifest the incredible effects of melancholy, and to fulfill old prophecies, rather than be the authors of new.[8]

5 Part II, sec. 11.

... and surely it is not a melancholy conceite to thinke we are all asleepe in this world, and that the conceits of this life are as meare dreames to those of the next, as the Phantasmes of the night, to the conceits of the day.[9]

これらの引用文中、形容詞として使われているのは、1、2、4の1番目(4aと呼ぶ)及び5で、名詞として使われているのは、3と4の2番目(4bと呼ぶ)である。以下、ブラウンの用法を形容詞、名詞の順に検討してみよう。

まず、1についてだが、この一節は若き日のブラウンが陥った異端について述べているものである。ブラウンは、自分が“despaire”(絶望)に陥らないようにしたものがその異端であると言っている。そして続けて「絶望」こそ“melancholy ... natures”(憂鬱な者)が陥りやすい心の状態だと述べている。つまりブラウンは、この場所で自分が“melancholy”な人間に属していることをはっきり告白しているのである。そしてさらに“melancholy”という語と“contemplative”という語が並べて置かれていることから、これらの2語が密接な関係にあることは自明のこととしてブラウンには了解されていたと思われる。つまり、この文章が書かれた頃(1635年前後)、ブラウンは“melancholy”そのものに対して肯定的な意味を見い出していたと言えるだろう。それは、後述するように、*Oxford English Dictionary (OED)* の“melancholy(a.)”の項目と符合する。

次に2について。学問のための“a general Synod”があればというのが、“a melancholy *Utinam* of mine owne”(私個人の憂鬱な悲願)ではなくて、“better heads”の願望である、という一節に於いて、“Utinam”という語を

“melancholy” で修飾している。ここに於いてもブラウンは自分の心情表現として “melancholy” を使う。この場合も “melancholy” は否定的な意味で使われているのではなく、“Utinam” が実現しないことを嘆く表現である。

1と2に対し4aは明らかに否定的な意味で使われている。同じ形容詞でも、1の場合は “contemplative” と併置され、さらにその後の語が “natures” であった。4aの場合は “melancholy” が単独で使われ、その後の語は “heads” である。この表現の違いは、肯定的な意味と否定的な意味の違いによるものと思われる。ブラウンは自分が “many melancholy heads” の一人ではないと考えているから、そういう “heads” を手厳しく批判する。

5ではブラウン特有の奇想、即ち「我々は皆この世では眠っている」という見方が “a melancholy conceite” ではないと述べている。この場合の “melancholy” の意味は否定的ではあるものの、4aほどではない。なぜなら4aの場合には、否定的な意味の語句である “mocked” や “neither ... understanding” などと一緒に用いられているからである。5では自分の奇想への修飾語として使うのだから、それも当然であろう。

名詞として使われている3では、“melancholy” は “Devill” 及び “delusion” と並べて置かれていることから、否定の意味を持つと言える。それもかなり強い調子の否定である。ここでのブラウンは “melancholy” を完全に悪いものとして考えている。

4bについても4aの後で用いられていることから、同じく否定的である。“incredible” という語に、そのことが窺える。こうしてみると、ブラウンは自分について述べる場合は、“melancholy” を肯定的に、そうでない場合は否定的に用いていると言える。そもそも “melancholy” という語自体が、その歴史から明らかなように、肯定・否定の両面を持つものであるから、ブラウンがそのどちらの意味を使っても何の不思議はない。また人間一般の心理として、自分について書く場合は、どうしてもそうなってしまうということがあるのだろう。

『医師の信仰』には、上述したものの他に、“melancholy” に関連した重要な一節がある。それは以下の箇所である。

Part II, sec. 11.

At my Nativity, my ascendant was the earthly signe of Scorpius. I was borne in the Planetary houre of Saturne, and I think I have a peece of

that Leaden Planet in me.[10]

ブラウンは、土星の刻に生まれたので、その鉛の惑星の一片が自分の中にあると思う、と述べている。即ち、自分が "melancholy" 気質の人間であることを自覚していることを明らかにする。そこには何か誇らしげな気持ちが見て取れる。その際ブラウンはもちろん "melancholy" を肯定的に受け取っているのである。

以上のように、ブラウンの最初の著作『医師の信仰』では、"melancholy" は肯定と否定という２つの側面を持っている。そして、語の意味は、形容詞の場合は「憂鬱な」、名詞の場合は「憂鬱」と解釈して不都合はない。つまり、ことさら本来の「黒胆汁」や「憂鬱症」という病気の意味で捉えなくても間に合うのである。ではブラウンの他の著作で "melancholy" はどのように使われているのであろうか。

(2) 『謬見蔓延論』

ブラウンの次の著作、『謬見蔓延論』(*Pseudodoxia Epidemica: or, Enquiries into Very many received Tenents, and commonly presumed Truths*, 1646)[6]では、"melancholy" は次の６箇所で使われている(下線は引用者)。

1 BOOK I, Chap. X.

And to this effect he maketh men beleeve that apparitions, and such as confirme his existence are either deceptions of sight, or <u>melancholly</u> depravements of phansie....[11]

2 BOOK II, Chap. VI.

So these traditions how low and ridiculous soever, will finde suspition in some, doubt in others, and serve as tests or trials of <u>melancholy</u> and superstitious tempers for ever.[12]

3 BOOK II, Chap. VII.

FEW ears have escaped the noise of the Dead-watch, that is, the little clickling sound heard often in many rooms, somewhat resembling that of

a Watch; and this is conceived to be of an evil omen or prediction of some persons death: wherein notwithstanding there is nothing of rational presage or just cause of terrour unto melancholy and meticulous heads.[13]

4 BOOK III, Chap. III.

It is not agreeable to the constitution of this Animall, nor can we so reasonably conceive there wants a gall; that is, the hot and fiery humour in a body so hot of temper, which phlegme or melancholy could not effect....[14]

5 BOOK IV. Chap. III.

An Inflammation either simple, consisting onely of an hot and sanguineous affluxion; or else denominable from other humours, according to the predominancy of melancholy, flegme, or choler.[15]

6 BOOK VII. Chap. X.

...'Twas surely an apprehension very strange; nor usually falling either from the absurdities of Melancholy or vanities of ambition....[16]

ここでもまず、形容詞と名詞に分けて考えたい。上記の引用文中、1から3まで形容詞で、4から6までが名詞である。

1は、人間を誤らせるサタンについての一節で、“his”とはそのサタンのことである。ここの“melancholy”(引用文中の表記は“melancholly”)は、“depravements”を修飾しており、否定的なニュアンスを持つ「憂鬱な」という意味に解釈してよいだろう。

2は、様々な植物に関する迷信を論じた章の一節で、いわゆるマンドレーク(別名マンドラゴラ)についてのものである。ブラウンはマンドレークの根が人間に似ていると言われることから始めて、それについてのいくつかの迷信を論破した後で、次のように述べる。そうした伝承は、「どんなに低俗で馬鹿げたものであろうと、そこに不審を見いだす者もいれば、疑いを見いだす者もいるだろうし、常に憂鬱な、迷信深い気質の試金石というか判断基準として役立つであろう。」この場合、“melancholy”は“superstitious”と並べられていること

から、人間の気質を示す一般的な用法と考えていいだろう。

3は、室内で聞こえる時計に似た音について述べたものである。その音は、凶兆や誰かの死の知らせと考えられているが、実際は虫がたてる音だから、「何の合理的な前兆もないし、憂鬱で臆病な人々にとって恐怖の原因となるものもない」とブラウンは説明する。そこで“melancholy”は、2と同様、“meticulous”といった人間の欠点を表す語と一緒に使われており、よくないものとして出されている。前述したように、『医師の信仰』でも、“melancholy ... heads”という表現が否定的に使われていたことを考えると、“heads”という語はブラウンにとっては価値の低いものなのかもしれない。

3は、鳩には胆汁がないということについて論じた章の一節で、ここに出てくる“melancholy”は明らかに今まで見てきたものとは異なっている。“phlegme”(粘液)と並べて用いられていることからわかるように、この場合の“melancholy”は「黒胆汁」という本来の意味である。ブラウンがこの文章を書いた時点で、ガレノスの四体液説を信じているらしいのは興味深いことである。なぜなら、ブラウンは、1646年、つまりこの『謬見蔓延論』が出版された年に、ヘンリー・パワー(Henry Power, 1623-68)に宛てた手紙の中で、「私はハーヴェイ博士の発見をコロンブスの[アメリカ大陸の]発見よりも高く評価します」[17]と述べているからである。「ハーヴェイ博士の発見」とはもちろん、血液循環の発見であり、これによって、ガレノス以来の四体液説は破綻し、近代医学が始まったと一般に言われている。だから、ブラウンがハーヴェイ(William Harvey, 1578-1657)を高く評価するというのは、裏を返せば、ガレノスに決別するということでもある。それゆえ、この箇所は1646年よりもかなり以前に書かれていたことが推察される。ハーヴェイが血液循環について論じた『動物の心臓ならびに血液の運動に関する解剖学的研究』(*Exercitatio anatomica de motu cordis et sanguinis in animalibus*)を出版したのは1628年だから、それ以降なのは確かであるが。そして、このことは、『謬見蔓延論』の執筆時期に関して、Robbinsが“Nevertheless, the raising in *Religio Medici* of questions treated of in *Pseudodoxia* suggests some continuity or even overlapping in work on the two books.”と述べていることを裏書きするかもしれない。[18] 『医師の信仰』が執筆されたのは1635年前後とされているから、『謬見蔓延論』のこの箇所も同じ頃かもしれず、それより前かもしれない。

4と同様のことが5についても言えるだろう。“Pleurisie”(胸膜炎)について書

かれたこの章で使われている“melancholy”も、「黒胆汁」という意味である。それは、“humours”、“flegme”、“choler”といった語から明らかである。四体液説を支持しているらしいことがわかる4と5からは、医師としてのブラウンのこの時点での立脚点が窺われると言ってよいであろう。ヨーロッパ大陸で当時の最先端の医学を学んできたブラウンにも中世医学の残滓が見られるということである。

6は、不死の信仰について論じた一節で、“'Twas”の“it”はその信仰を指している。ここにおける“melancholy”は、“ambition”と対になっていることからわかるように、「憂鬱」という意味で用いられていると考えていいだろう。同じ名詞でも4と5の「黒胆汁」という意味とは異なり、抽象性が増している。また“absurdities”と結びつけられていることで、ブラウンがここの“melancholy”を価値のないものと考えていることがわかる。

(3)『壺葬論』と『キュロスの庭園』

『壺葬論』(*Hydriotaphia, Urn-Burial, or, A Brief Discourse of the Sepulchral Urns lately found in Norfolk*, 1658)と『キュロスの庭園』(*The Garden of Cyrus, or The Quincuncial, Lozenge, or Network Plantations of the Ancients, Artificially, Naturally, Mystically Considered*, 1658)は一冊本として出版された。『壺葬論』の中で、“melancholy”は2回使われている。それらは次の箇所である(下線は引用者)。

1 Chap. IV.

Happy are they, which live not in that disadvantage of time, when men could say little for futurity, but from reason. Whereby the noblest mindes fell often upon doubtfull deaths, and <u>melancholly</u> Dissolutions....[19]

2 Chap. IV.

It is the heaviest stone that <u>melancholy</u> can throw at a man, to tell him he is at the end of his nature; or that there is no further state to come, unto which this seemes progressionall, and otherwise made in vaine....[20]

1の“melancholy”(引用文では“melancholly”)は“Dissolutions”を修飾しており、「憂鬱な」という一般的な意味の形容詞として使われている。つまり、“Dissolutions”の状態をブラウンは“melancholy”だと感じているのである。

2の“melancholy”は名詞であり、これもまた「憂鬱」という一般的な意味である。「憂鬱症」というように言い換えることもできるが、その場合でも、病気と言うよりはむしろ人間の精神状態を表すもっと広い意味であろう。

『キュロスの庭園』では、“melancholy”は1回しか出てこない。それは次の箇所である(下線は引用者)。

Chap. I.

> ... in his <u>melancholy</u> metamorphosis, he found the folly of that delight, and a proper punishment, in the contrary habitation, in wilde plantations and wanderings of the fields.[21]

この一節の“he”とはネブカドネザル2世のことで、“metamorphosis”は神が彼に与えた“punishment”を指す。“melancholy”はその“metamorphosis”を修飾する形容詞で、ここでも単に「憂鬱な」という意味である。

(4) その他の作品及び書簡

ブラウンの『夢について』(“On Dreams”, 執筆年代不明)では“melancholy”は一度だけ出てくる(下線は引用者)。

> ... the soberest heads have acted all the monstrosities of <u>melancholy</u>, and which unto open eyes are no better then folly and madnesse.[22]

ここで“melancholy”は名詞として使われている。この“melancholy”も『キュロスの庭園』の中のものと同じく、一般的な意味である。

ブラウンは書簡でも“melancholy”を何度か使っている。[23] その中で特に注意したいものは次の箇所である。

... Malencholy, wch is purely sadnes without a reasonable cause.[24]

これはブラウンが娘に宛てた書簡の一節であるが、ここでの“melancholy”(引用文では“Malencholy”)は一般的な意味で、「悲しみ」と同じとされている。この書簡が書かれたのは、1681年、ブラウンの最晩年である。この時点でのブラウンは、“melancholy”に対して、若い頃のように占星術的・哲学的な意味を付加するのをやめているようだ。相手が娘ということもあるかもしれないが、『医師の信仰』の中で、誇らしげに憂鬱気質について語っていたことを思うと、時代の変遷の著しさを感ぜずにはいられない。ここでの“melancholy”は現代の我々が理解しやすいごく普通の抽象的な名詞として使われている。

3　17世紀に於ける“melancholy”

既に見てきたように、ブラウンは“melancholy”をほとんど「憂鬱」という一般的な意味で使っている。「黒胆汁」という本来の意味や、「憂鬱症」という病気の意味で使っている場合は数少ない。

*OED*の“melancholy”(n.)の項目によれば、語義の1にある「黒胆汁過多の状態。その結果生ずると考えられる病気」という意味では、初出は1303年、最後の例は、1866年である。最後の例の前の例は1722年だが、その例も最後の例とともに、医学文献中の特殊な例と思われるので、実質的にはそれ以前かもしれない。*OED*には特に注記があって、そこに“From the 17th c. onwards the word was used without its ætiological implication as the name of the mental disease now called in technical language MELANCHOLIA.”と書かれていることからもそう言えるだろう。

また、語義の1b「黒胆汁そのもの」は最後の例が1653年である。形容詞としての“melancholy”も、*OED*によれば、「黒胆汁の、あるいはそれに影響された」という意味の例は、最後のものが1667年である。こうしてみると「黒胆汁」という意味で“melancholy”が使われたのは17世紀までと考えてもいいかもしれない。それは、前述したように、ガレノスの体液説が、ヴェサリウス以来の解剖学の発展やハーヴェイの血液循環の発見による近代医学の勃興によって、否定されていく時期に当たっている。医者であったブラウンがそういう時代の趨勢に無頓着であったとは思われない。あれほどハーヴェイの発見を高く評価

していたブラウンだから、なおのことそうである。上述したようにブラウンは“melancholy”を「黒胆汁」という意味でも使っていたが、我々はそこに長い伝統を持つ中世医学から近代医学へと移行していくさなかの混沌とした精神風土を垣間見ることができる。“melacnholy”という語がその医学的な意味合いを失い、もっと一般的な語として使われていくのは、そうした精神風土の反映と考えていいかもしれない。ブラウンは医者だったから、“melancholy”の原義及び歴史的由来も十分承知していただろうと思われる。従って、ブラウンが“melancholy”という語を使うときは、ほとんど「憂鬱」という一般的な意味、つまり現代の我々がごく普通に理解可能な意味であったことは、ブラウンにとって当然のことだったと言えるだろう。

註

1 Susan Sontag, Under the Sign of Saturn (New York: Farrar, Straus & Giroux, 1980).
邦訳は、スーザン・ソンタグ著富山太佳夫訳『土星の徴しの下に』(晶文社、1982)。
“Sontag”という彼女の姓はドイツ語の“Sonntag”(日曜日)を容易に連想させ、その中に星(太陽)の名称が使われていることから、ソンタグは占星術の言い回しを自らの著書の題名に用いたのかもしれない。偶然だろうが、Susan Sontag のイニシャルがSSで、原題*Under the Sign of Saturn*もSSが見られる。同書収録の“Fascinating Fascism“ におけるFFなど、ソンタグには頭韻好みがあると言えるだろう。

2 melacnholyについての基本文献は、
Raymond Klibansky, Erwin Panofsky and Fritz Saxl, *Saturn and Melancholy: Studies in the History of Natural Philosophy, Religion and Art* (Thomas Nelson & Sons Ltd., 1964)である。
邦訳は、レイモンド・クリバンスキー、アーウィン・パノフスキー、フリッツ・ザクスル共著田中英道監訳『土星とメランコリー：自然哲学、宗教、芸術の歴史における研究』(晶文社、1991)。なお、次の本も参考になる。
Rudolf Wittkower and Margot Wittkower, *Born Under Saturn: The Character and Conduct of Artists; A Documented History from Antiquity*

to the French Revolution (Weidenfeld and Nicolson, 1963).
邦訳は、R・ウィットコウアー、M・ウィットコウアー著中森義宗・清水忠訳『数奇な芸術家たち：土星のもとに生まれて』(岩崎美術社, 1969)
Bridget Gellert Lyons, *Voices of Melancholy: Studies in Literary Treatments of Melancholy in Renaissance England* (Routledge and Kegan Paul, 1971).

3 Hippocrates, *Works*, ed. and trans. W. H. S. Jones (Loeb Classical Library, New York, 1923), IV, 11-13.

4 戸塚七郎訳『アリストテレス全集　11　問題集』(岩波書店、1968)、p.413.

5 C. A. Patrides(ed.), *Sir Thomas Browne: The Major Works* (Penguin Books, 1977), p.67.

6 Patrides, p.92.

7 Patrides, p.98.

8 Patrides, p.118.

9 Patrides, p.154.

10 Patrides, p.154.

11 Robin H. A. Robbins(ed.), *Sir Thomas Browne's Pseudodoxia Epidemica,* vol. I (Oxford University Press, 1981), p.64.

12 Robbins, p.146.

13 Robbins, p.153.

14 Robbins, p.168.

15 Robbins, p.297.

16 Robbins, pp. 566-67.

17 Sir Geoffrey Keynes(ed.), *The Works of Sir Thomas Browne*, 2nd ed., vol. IV (Faber & Faber, 1964), p.255.

18 Robbins, xxi.

19 Patrides, p.305.

20 Patrides, p.305.

21 Patrides, p.327.

22 Patrides, p.475.

23 Keynes, pp. 4, 12, 96, 103, 129, 131, 158, 200, 221(adj.).

24 Keynes, p.200.